
バレンタインデーラブソデー

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインデーラブソデー

【Nコード】

N5814D

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

2月14日は女の子の一大イベント！学校中の女子に大人気のサッカー部の王子様と、やっぱり彼が大好きな3人のクラスメート。笑いと涙の友情物語。

第1ハーフ（前書き）

こっちは軽いコメディです。

第1ハーフ

うちの高校は生徒に対してフレンドリーで、2月14日のバレンタインデーは生徒たち（教師も含む？）の一大イベントになっている。

その一大狂詩曲の中心にいるのが我が2年A組の菊池瞬（きくちしゅん）君だ。もてない男が何をブーたれようが今年の主役は彼に決定！ なんてったって我が校の、ほどほどに強い、サッカー部のエースストライカーなのだ！ ルックスだってキュートで美的で王子様なのだ！

そんな彼に恋しない女子はいない！・・・わたしだって・・・

昼休みである。

「あゝ、女子諸君！ わたしはサッカー部前主将3年B組近藤勇一である。菊池瞬君へのチョコレートのプレゼントは我がサッカー部が一括管理させていただく」

えゝゝ！？と女子たちから不満の声が上がる。昼休みになって3年生のごつい先輩たちがドカドカ教室に入ってきて何事かと思っただらさつさと瞬君の腕を掴んで廊下に連れ出した。キャーッ、何イッ！？と思っただら机と椅子まで運び出されて、瞬君を座らせると前主将さんのゴリラさん（失礼！）が演説を始めた。クラスの女子はもちろん、瞬君にチョコを渡そうと集まってきた他のクラスの女子たちもいつせいに「ええゝゝ！？」と不満の声を上げたのだった。「えーい、うるさいうるさい、メス犬ども、もとい、女の子諸君。考えてもみたまえ、君たちの渡すチョコレートを愛しい瞬君が全部食べられると思うかね？」

女子たちは手に持った包みを胸に抱いて女の子同士顔を見合わせた。

「だろう？ んなことしたら愛しの瞬君がまるまる太った豚足王子

になつてしまふぞ」

主将ゴリラはわっはっはっはと一人で大笑いした。

「まあ、ぶっちゃけ、大半のチョコレートは、俺たちサッカー部員の腹んなかに収まって激しい練習のエネルギーになるわけだ」

再びええ〜っ！と抗議の声が上がった。

「うるさいうるさい！ だから、さ、俺たちが部でちゃんと管理して、君たちからプレゼントされたチョコレートは必ず一切れは菊池君の口に入るようにする。残りは順次練習後部員で分けて食^{しょく}させていただく。な？その方が平等でいいだろう？」

ごつい顔に笑いかけられ、2年の女子たちはうなずくしかない。

まあ、平等ということでは文句も言えない。暇な前主将は上機嫌に笑つて言った。

「じゃあ一列に並んでくれ。これより菊池瞬君へのチョコレイトプレゼントの手渡し会及び握手会を開催しまゝす！ ささ、時間は限られているぞおー、菊池君にチョコを渡したい女子は速やかに列に並びたまえ〜！！」

みんなしょうがなく一列に並び、思いがけず近くにいて列の先頭になった隣のクラスの女子はリボンの付いたピンクのチェックの紙袋を瞬君に渡し、「握手をどうぞ」と笑顔の前主将に言われて握手をし、「キャッ」と真っ赤になった。おーおー、幸せそうに笑顔をとろけさせちゃって。

「はい、次の方どうぞー」

「あ、あの、応援してます。頑張ってください・・・」

「ありがとう・・・」

チョコを手渡して握手。キャッ。チョコレイトの袋はサッカー部員が受け取っててきば大きなエコバッグに詰めていく。

「はい次の方ー」

「お、応援してます！ キャッ」

「ありがと・・・」

サッカー部が仕切っているものだからみんな「応援してます」に

なっちゃってる。女の子はみんな嬉しそうに頬を染めて、瞬君も頬を染めて実に恥ずかしそうに握手をしている。

ゴリラ主将は列に向かって言った。

「我がサッカー部は来週の宿敵上南高校との練習試合を控えて猛練習のまっただ中だ！ 放課後は20分しか時間を取らないから菊池にチョコ渡したい女子はちゃんと列に並んでくれー！」

あまりに長い列の様子を見に来た女子がチラホラ見える。

列はずら～と、B棟2階の廊下を端まで延び、さらに階段を下って1階に伸び、さらにさらにA棟への渡り廊下へ伸びている。その列をサッカー部員が総動員で整理している。

報告を聞いてゴリラ主将は

「うむ、やはり整理券を配らなくてはならないか。よし、渡り廊下から先は配布開始！」

と、指示を出した。しっかりと準備をしている。だいじょうぶか、受験生！？（それとももう大学決まって暇なのか？）

しっかし渡り廊下から先って、全校の女子生徒が瞬君にチョコを渡すのか？

しばらく順調に進んでいたプレゼント&握手会にトラブル発生。

3年生の女子たちがやってきて列を無視して直接瞬君にチョコをプレゼントしようとしたのだ。

「瞬くん、お姉さんの愛を受け取ってえ（ハートマーク）」

「こらこらあ、列に並ばんかい」

当然ゴリラさんが注意する。

「なによお、あんた馬鹿？ 受験のまっただ中の3年にそんな暇あるわけないでしょ！？」

「ごもつとも。」

「うっせーな。スポーツマンシップに則り不正は許さん！ ほらほら、抗議の目を見る、オバハン」

3年生のお姉さまにキツと睨まれて周りの2年生女子たちはさっ

と視線を外した。

「まあまあ」

ポン、といっしょに来たお姉さんがにこやかに友人の肩を叩いた。
「いいじゃんヒロコ。気分転換に来たようなもんだしさ。いっしょに列に並ぶのも楽しいじゃん」

「しょうがないなー。じゃね、瞬く〜ん（ハート）。また後でね〜」
怖いお姉さんも納得して列の後ろ（はるか先なんだよ〜ん）に向かおうとした。

「こら待て」

ゴリラさんが呼びかけた。

「今から並んだって整理券もらっただけで昼休みが終わっちゃうぞ。ほれ、クラスメートのよしみだ、取っとけ」

自分の生徒手帳にメモしてビリッと破き、渡した。『前キャプ命令！この女を放課後1番にすること！』。お姉さんは受け取るとニヤツと笑うと「サンキュー」とメモをヒラヒラさせて歩いていった。

「惚れてるな、男」

ミノコ「実畠涼子（みのはた りょうこ）がキラリーンと目を光らせて言った。

「誰が？誰に？」

あたしはモグモグお弁当を食べながら訊いた。

「あのゴリラのキャプテンさんが今の3年女子によ」

「ふう〜ん」

モグモグ。

あたしはお弁当を食べ続ける。昼休みに至るまでもなく早弁を済ませてしまっているミノコはさつきから廊下に顔を覗かせてはいちいち戻ってきてあたしに報告してくれる。

「トロい！」

ビシッとあたしに指を突き立てる。モグモグ。ミノコは「はあ〜」とがっくり肩を落とす。

「セイラ、あんたいつまでお弁当食べてんのよ？ 見てみ、もうあんた一人よ」

見渡せば、なるほど、あたし一人だ。じくじくとミノコに見つめられてあたしは慌てて残りのご飯をかき込んだ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

「あんたはあたしのお母さんか？」

あたしはえい！と手刀を振り下ろすかっこうをした。

「この大ぼけコンビ」

と別の声がした。

「出た」

とミノコ。

「なにが出た、よ？」

腕を組んで美原仁美（みはらひとみ）＝通称ビジンさんが仁王立ちしていた。

・・・この子も、クラスで1番の美人なんだけど、ちょっと浮いている（別に大金持ちのお嬢さんだったりはしない）。

ビジンさんは色白の細面に大きな目でジロリとミノコを睨んだ。

「さつきからなーに？ 菊池くんの周りをうるさく飛び回って。あーあ、ピーチクパーチク、みっともないったらないわね」

ピーチクパーチク・・・ミノコも負けない。

「あんたも素直に『瞬くん』って呼んだら？ あーあ、いじましいこって」

「うるさいわね！ わたしはその・・・ちゃんと、その・・・ラブラブになっから・・・」

真っ赤になっで最後の方は「んん？」とダンボの耳を近づけても聞き取れないほどか細い。まったくラブリーな子だ。「えーい、うるさいうるさい！」と両手をバタバタ振り回した。「あなた！ ミノコさん！」と指をビシッと突き立てた。

「敵前逃亡とは見損なったわ。オーホホホ、あなたみたいな意気地

のない方を好敵手と見ていた自分が恥ずかしいわ」

好敵手はライバルとは読まずこうてきしゅと読む。ビジンさんは昼メロというか、ちよつと大正ロマンが入っている。ルックス的にも夢二美人だ。

ところであたしたち三人を指してクラスでは「トリオ漫才」と称していることをビジンさんだけは感知していない。知ったら怒るだろうなあゝゝ、あたしはけっこう嬉しいんだけど。

「ぬあゝゝ」

ミノコが大げさに怒って言い返した。

「誰が敵前逃亡よ!? あんたこそ、どうすんのよ?」

「おほほほ」

ビジンさんはおちよぼ口でお上品に笑った。怒れるミノコを横目に見て。

「あんな列になんて並ぶものですか。わたしは本気で瞬くんが好きなの。最初っからファンの一人でいいなんていう自分をごまかすような場所にはいたくないの」

「なんだってえゝ!!」

怒るミノコをそっちのけでビジンさんは「あらわたくしとしたことが、つい、シュンクン、だなんてゝゝ。ポツ」と赤くなっている。

「こら、仁美」

ミノコはちよつと本気で怒っている。

「なんだよ、自分をごまかすって? ちゃんと好きだって言ってるのに、何がごまかしてるんだよ?」

ミノコは朝練から帰ってきた瞬くんに「はい! バレンタインデーのチョコ! あたしの気持ち受け取って!」とクラスメートの前で堂々とチョコレートの包みを差し出した。瞬くんは「ありがとう」と恥ずかしそうに受け取っていた。ミノコは「イッチバーン!」と頬を染めてブイサインを出していたが、ゝゝ実は瞬くんは教室に帰ってくるまでに何人もの女子からカバンいっぱいチョコレートを渡されていたりするんだなあゝゝ。その後も始業のチャイムが鳴るま

で数人の女子が瞬君にチョコを渡していた。休み時間中も。クラス
の女子はほぼ全員渡しちゃったんじゃないかな？ ビジンさんとあ
たしを除いて……。

「おほほ……。だって、返事も訊かずに一方的に渡して満足、なん
て、最初っから彼女になるのをあきらめているようなものじゃない
？」

「そ、それは……。だって……」
ミノコ……。

「わたしは違うわよ。1対1でしっかり告白して、ちゃんと菊池君
の気持ちを確かめるんだから」

ビジンさんは冷たい目でミノコを見下している。ミノコは悔しそ
うにうつむいている。おいおい、仲良くしようよお。

「あのね、ミノコ、ビジンさん。年に一度の楽しいイベントなんだ
からさ、もうちょっとこう……。女の子らしく夢見る気分でいようよ
おー」

「あんだ！」

「あなた！」

二人同時に呼びかけ、

「は、はい……？」

二人は睨み合うとその恐い目を同時にあたしに向けた。

「セイラ

「セイラさんは、どうなのよっ！？」

「あのー、だからね、夢見る乙女の楽しいイベントを……」

ああ、二人の恐い目はあたしを逃がしてくれない……。ビジンさ
んが言う。

「あなただって菊池くんが好きなんでしょ？ 違うとは言わせない
わよ、その目に菊池君ラブって書いてあるわ！ わたしに彼を取ら
れるのなんて嫌でしょ？ だったら正々堂々あなたもわたしと勝負
なさい！ わたしの恋の好敵手として、彼女のような卑怯な真似は
許さないわ！」

ミノコの目にカチーンと星が散る。

「誰が卑怯な真似よ！ と、それはこっちに。セイラ。あんたもイベントに参加しなよ。後悔するよ？」

「ううーん・・・あたしはねえ・・・」

弱ったなあ・・・。笑ってごまかしても許してくれない。

「そりゃあ瞬くん、好きだよ、憧れるよ。かつこいいもんね、女の子なら当然だよ。でも・・・なんていうかなあ・・・あたしはその・・・いいよ」

「「よくない！」」

と、即座に二重奏が返ってくる。あたしはまた笑ってごまかす。

「いやいやほんと。例えばさあ、あたしミノコもビジンさんも好きよ。二人のどっちかが瞬くんの彼女になるんだったら、あたしはすっごく嬉しいと思うけどなあー」

それは本当だ。そう思うよ、うん。・・・と、自分で確認する・・・。

「そう。それはありがとう。でもねー」

ビジンさんがホラーに微笑む。

「わたしはイ・ヤ・よ。もしこの女が菊池君の彼女になったりしたら、顔に口紅でデカデカ『ブス』って書いてやるわ」

ビジンさんに挑戦的に嘲笑われてミノコも

「あたしだってあんたのその細っこい天パー髪に噛んだガムをひつけてやるわよ！」

「まあお下品！」

「美人だからってなめるなよー、あんたなんか二十歳過ぎればただのふけ顔よ！」

「おいおい」

やっぱり漫才になってるよー。クラスメートたちの目が笑ってるぞー。

二人は息もぴったりに「フンッ」とそっぽを向き合い、

「卑怯者」

「後で吠え面かきやがれ」

とあつちとそつちに行つちやつた。

取り残されたあたしは・

「卑怯者・・・かな?・・・」

と呟く。もちろん、あたしのことだ・・・。

ミノコは他の女子とおしゃべりを始め、ビジンさんは一人静かにハイネの詩集なんて広げている。

教室はエアダクトから温風が入ってきているけどドアは開きっぱなしで、廊下に並ぶ女の子たちの姿が見える。あっちの方が暖かそうだ。列の前方、瞬くんを見て、連れだった友だち同士笑い合つて、でもその顔は緊張にガチガチで、それが女の子らしくて可愛い。列が前に動いたび、きつと胸をドキドキ高鳴らせているんだろう・・・。

あたしもあの列に並んだら、もつと女の子らしくドキドキして、恋する楽しさを味わえるのかなあ?・・・

こうして眺めているだけのあたしは二人の言うとおり「意気地なしで敵前逃亡以前の卑怯者」で、最初から「諦めてるんだ」と自分をごまかしている。ああ、自己嫌悪。

二人は、本当に瞬くんが好きなんだ。

ビジンさん、言い過ぎだよ。ミノコだって本当に瞬くんが好きなんだ。

あの女の子たちだって、卑怯者なんかじゃないよ。

そりゃあみんな瞬くんの彼女になりたいに決まってるよ。

でも、そういう幸運な彼女は一人きりなんだ。・・・複数いたら困るよね。瞬くんはそんな人じゃありません!

どうかな? その幸運な彼女を、みんな恨むのかな? それとも祝福する? 祝福できる?

きつとみんな泣くよ。自分が瞬くんを好きな気持ちに苦しんで、なんでこんなに好きになつちやつたんだろう? って後悔して。でも、泣いて泣いて、泣き尽くして、そうしたらきつとスッキリするよ。瞬くんを好きになった自分の気持ちがとっても愛おしくて、誇らし

くて、大切な宝物になるよ。きっとそんな自分が前より少し好きになるよ。

・・なーんて、最初からふられた気持ちを考えちゃってどうするんだ？ でも現実的にあそこに並んで恋する乙女の顔をしている少女たちは、みんな、そういう苦しみを体験することになるんだ・・。

ミノコも泣くのかな・・・

ビジンさんも泣くんだろうな。あの子は本当に純粹でまっすぐな子だから。その涙がうれし涙だったら、わたしはきつとすごく嬉しいと思う・・、ウン、思うよ・・。

あたしはダメだね。あたしに泣く権利はない。こんな傍観者面して、自分の気持ちをごまかして。あたしの後悔は、すっごく後味の悪いものだろう・・・。ああ、早くも自己嫌悪の泥沼。

しょうがないよね、

聖良則子（せいらのりこ）、乙女座9月1日生まれ、高校2年17歳、美術部員、

って、誰にともなく自己紹介。ビジンさんほどではないけどそこかわいいと思う。けど、美術部員だもんねえ。こんな根暗な文系少女、スポーツ万能、サッカー全能、容姿端麗、学校中の女子の憧れを一身に集めるスーパー王子様が、・・あ・た・し・なんかねえ・・と、つい演歌調にうなってしまっじゃないのよ。

あー、お茶らけている自分にまたしても自己嫌悪。桃色ハートのバレンタインデーが、なんでこんなにダークブルーなんだ？

あたし、バレンタインデーって、嫌い？

嘘つき。

ちゃーんと、

カバンの中には手作りチョコの豪華箱詰めが入っているくせに・・美術部員だぞ、美的に、けっこう頑張って自信あるのになあー・・あたしの、
バカ。

第2ハーフ

5分前の予鈴が鳴った。

「うお、菊池！急げ！あと20メートルだ！」

前主将さんの焦る声に列に並んだ女の子たちの顔も心配そうに曇る。「急げ！」って言われちゃあねえ、そりゃガツカリだ。

「こらこら、授業が始まるぞお！」

もう次の英語の先生が来ちゃった。

「先生！ 武士の情け！ どうか今しばらくご猶予を！」

「5、4、3・・・はい、」

無情に鳴り響くチャイムの音。うおと吠えるゴリラ。

「アウト。ほらほら、さっさと散れ」

「先生え。頼む！」

ああ、女の子たちの涙が見えるようだ・・・。

「バーカ。おまえらも、教師に叱られる覚悟があるなら勝手にしろ。ちなみにわたしのクラスの罰は・・・バレンタインデーの論文でも提出してもらおうか、もちろん、英語でな」

はっはっはー、と高笑いを上げてイングリッシュティーチャーのミスター相沢が入ってきた。ちなみに、おでこがまぶしい。背後から「先生、ありがとー」とゴリラの吠える声が返ってきた。先生、今日のあなたは本当にまぶしい！・・・保護者にばれたらまずいんじゃないかと思うけれど、いい学校だ。

5分後被害者の瞬くんが頭を下げながら入ってきて、

「後ろに立っとれー、この色男」

と怒られて教室に笑いが起こった。後ろに立たされた瞬くんは黒板の例文を読まされて席に返された。論文の宿題は本当に出されるのかなー？

放課後になった。

「おい、菊池、始めるぞー」

前主将さんが3年のお姉さんたちを引き連れてやってきた。お姉さんたちの笑顔はピカピカだ。「瞬く〜ん」とハートマークをまき散らして華やかな声が呼びかける。廊下には整理券を握り、胸に大事にチョコレートのお包みを持った女の子たちが並び始めている。1年生の女子が多いようだ。2年生は昼休みのうちにだいたい渡し終わったのだろう。1年生たちは恥ずかしそうにでも嬉しそうに初々しく桜色に頬を染めている。上級生に声をかけてチョコを手渡すのもかなり勇気がいるだろうし、彼女たちにとってこの制度は良いかもしれない。

と、言う主人公たるあたしのモノローグは例によってミノコのレポートを元にあたしの頭の中でワープロ打ちされている。

前主将さんと呼ばれて瞬くんは「はい」と返事をしながらカバンにあたふたと教科書やらなんやらを詰め替えてもたましながら廊下に向かった。

！・・・・・・

なんか・・・、チラッと・・・、あたしを見ていったような気がするけど・・・

気のせいだね？

それともクラスの女子でチョコをあげてないのはあたしとビジンさんくらいのもだから、それでかな？ いやいや、瞬くんがそんなさもし根性をしているとは思えない。

やっぱ気のせいだね・・・、うん・・・。

ビジンさんはミノコに『フン』と顔を背けて廊下へ出ていった。

あたしはミノコに「ねえ、ビジンさんと仲直りしなよ」と言った。

ミノコは忌々しそうに眉間にしわを寄せながら「するわよ。友だちだもん」と言った。ああ麗しきかな女の友情。トリオ漫才万歳！

「で、あんたはどうすんの？」

「あたし？ 今日も部活だよ」

「じゃなくってえー。チョコ。入ってんでしょ？」

陰険な目つきであたしのカバンを指さした。・・バレバレだあ。

ミノコはニタツと笑って

「ビジンさんといっしょに勝負してきたらあ？」

と言った。あたしは考える。

「そんな勇気ないよ」

「後悔するよ？」

「・・・・・・」

「あゝあ、ほんとに後悔するよ。けっこー脈ありだと思っただけだなあー」

「え？」

「瞬くんってさ」

ミノコはまじまじとあたしを見つめて言った。

「案外みんなが思っているような人じゃないと思っただけだなあー」

「じゃあ・・、どういう人？」

「さあね」

ミノコは意地悪く話をはぐらかせた。

「たださあ、勝手なイメージ押し付けられて、けっこう迷惑してんじゃないかと思っただけさ」

「・・・・・・」

スポーツ万能でキラキラの王子様じゃない瞬くんって、どんな男の子なんだろう？・・とあたしは考えた・・

「あんた、瞬くんのどこが好き？」

「・・・・・・」

「あたしはさ、やっぱり王子様なところがいいんだよね」

あはははは、と軽やかに笑った。

「けっこう迷惑なファンかもね？ だから、あたしはただのファンでいいんだ。ビジンさんの言うように楽な位置でさ、ただのファンやってるのだって、楽しくていいじゃん？」

ミノコが本心でそう言っているのか分からない。でも、ミノコの

瞬くんを好きだって気持ちは、やっぱり、本当なんじゃないかな？

・無理してない？ミノコ・。

ミノコは明るい笑顔で言う。

「でも、やっぱりあんたはちゃんと勝負してきなよ。でないと、本当に仲直りできないよ」

ビジンさん・。列になんか並んでないよね？　きっと練習が終わるまで、ずっとグラウンドで待っているんだ・。。

「行け！　セイラ！　出撃だ！　ライバルに先を越されるな！　行って、玉砕してこい！」

「玉砕しちゃダメじゃん」

あたしもようやく笑えた。ミノコは大まじめで言う。

「土曜日に三人でカラオケに行くぞお。中島みゆきの『恨みます』を三人で歌うぞ！」

「歌いたくないって」

「じゃあ安室の『Can You Celebrate?』。安室を歌いたかったら、どっちかデートの約束取ってこい。ただし土曜は予約済みだからね」

ミノコの頑張って睨んでいる顔にあたしは笑顔で「分かった」と答えた。

「セイラ、行きます！」

「行って来ーい！　骨は拾ってやるぞ！」

なんかのパロディー（あたしこのアニメ知らないんだ）をやりながらあたしは教室を出た。

列はまだ続いていたけれど、終わりは見える。暇な3年生が2人交通整理をやっているだけで、瞬くん以外の現役部員たちはとくに練習を始めているらしい。

あたしは瞬くんを振り返らず、『勝負！』とピンクの炎をメラメラ燃やしながら好敵手ビジンさんの元へ向かう。

グラウンドに行くんだからまずは玄関で外履きに履き替えなくち

や。

グラウンドに下りるわけじゃないんだから通学靴でいいんだよねーと駄箱から靴を下ろして足を入れると、右足、爪先になんかつかえた。

何かと中を探ると、2つに折られた一枚のメモが入っていた。

「・・・・・・うそ・・」

その文面は、とうてい信じられないものだった・・・・・・。

グラウンドにビジンさんを見つけてあたしは歩いていった。

「ビジンさん」

「セイラ。なに？ 冷やかし？」

「勝負よ。あたしも瞬くんが好きなの」

「あらそう」

ビジンさんは嬉しそうにニヤリと笑った。

「じゃあ正々堂々と勝負。負けたって恨まないでね」

「そっちこそ」

あたしはビジンさんのとなり立つて仲良くグラウンドを見下ろした。うちの学校のグラウンドは周りが土手になっているのだ。向こうで野球部が、こっちでサッカー部が、あっちではラグビー部が、こっちの隅っこでは陸上部が、それぞれ元気に声を出して練習に励んでいる。厚いコートを着て震えている自分が恥ずかしいが・・

「ところでビジンさん、そのかつこう・・」

ビジンさんは黒のスタジアムジャンパーを着ている。背番号10。もちろん瞬くんの背番号。で、だぶだぶ。

「もしかしてそれって・・」

「もちろん、菊池くんへのプレゼントよ。毛糸のセーターとかマフラーが定番でしょうけれど、そんなありふれたものではわたしの本気の誠意は伝わらないわ！」

「ということは、もしかして・・」

「当然、手作りよ。半年前からこの日のために準備してきたのよ！」

「そ、そうなんだ・・」

あたしも昨日はけっこう気合い入れて手作りチョコを作ったけれど、さすが、あたしとは気合いの入りが違う。取りあえず今の時点での負けは認める。

実は、グラウンドの丘に立つのはわたしたち二人だけではない。

20人くらいの女子がサッカー部の練習を見学していて、きつと彼女たちはもう瞬くんにチョコを渡しているのだろう。いや、瞬くん目当てとは限らないけれど、まあ、きつとそうだろうな。だって・みんなチョコの紙袋を堂々と持つビジンさんを冷たい目で睨んでいるもの。こんな寒空の下練習を見学しているくらいだもん、かなり本気の瞬くんラブ！の子たちだろう。自分たちも1対1で手渡したかったのも我慢して列に並んでプレゼントしたんだろう。ああ、わたしもカバンの中を取り出すのが怖い。それなのにビジンさんたら黒地に白字で「LOVE」とデカデカ書いた、ゴールドのリボンをかけた目立ちまくりのチョコ袋を堂々と抱えて、凜と立っている。あなたってほんと素敵だ。惚れちゃうよ。

あたしも覚悟を決めてビジンさんと同盟を組んでチョコ袋を取り出した。えーい、見ろ！美術部エース渾身の「飛び出すカード」付きの赤いハート型チョコボックスを！

ビジンさんはニヤリと笑った。

「なかなかやるじゃない」

あたしもふっふっふーと不敵に笑い返す。

「ビジンさんこそ、そのジャケツト、プレゼントするんだよね？瞬くんの練習が終わったら？　ってことはさー」

「・・・・・・・・」

さすがのビジンさんも真っ赤になった。その様子が可愛らしくくてあたしは意地悪に言っちゃった。

「ふうーん。ビジンさんったら、ダ・イ・タ・ン。わたしのぬくもりをあなたに着せてあげるゝなんて」

「さ、寒いでしょ？　汗をかいて急に冷やしたら風邪をひいてしま

うわ・・・」

最後の方は限りなくフェードアウト。頭から湯気が上がってますよ。あたしは笑って言った。

「バレンタインデーって楽しいね」

「そうね」

キヤーと見学の女子たちから歓声が上がった。ようやく瞬くんが登場したのだ。現キャプテン・・えーと、たしかC組の人・・に遅れたお詫びをして「よろしくお願いします！」と元気に仲間たちの練習に加わった。

「瞬くーん！ 頑張つてえーん！！」

周りから黄色い歓声が飛ぶ。瞬くんは気を取られることなく真剣にボールを追って走り回る。華麗な脚さばき。かっこいい！！！！

P K 戦

30分経ち、1時間経ち、辺りはすっかり夜の暗さになってフィールドに照明が灯された。練習を見学していた女子たちはだいたい減ったけどそれでもまだあたしたちの他に5人頑張っている。

照明が灯されたのを見て名前不明のキャプテンが瞬くんを呼んだ。
「おまえもういいや。今日は上げれ」

瞬くんは青天の霹靂（せいてんのへきれき）とキャプテンに抗議した。

「なんでですか？ 俺、ちゃんと練習に集中してますよ？」

「あー、うつせー。俺が集中できねえんだよ」

キャプテンは乱暴に言うにあたしたちの方を見た・・・見たのは、
ビジンさん？

「バス2つ乗り継いで帰るんだろ？」

「誰が？」

「あー、うつせー。そうなんだよ！ だから、こんな遅くなったら・心配じゃねえかよ。いいから、てめえ、帰れ！」

乱暴に瞬くんのお尻をけつぽるキャプテンに周りの部員たちはひゅーひゅーと冷やかしの声をあげた。はあゝん、みんな知ってるだ。あたしはニヤニヤしてビジンさんを見た。ビジンさんは・・・緊張した（寒さでこわばった？）顔でひたすら瞬くんを見つめている。
お気の毒なキャプテンさん。

瞬くんは不満ながら「お疲れでした。先失礼しまーす」と頭を下げて部室に向かった。

ビクツとビジンさんが痙攣するみたいに飛び上がった。

「い・・・いよいよね・・・」

ガッチガチに緊張しまくっている。これだけ緊張した人となりにいるとこっちは却って落ち着いてしまう。あたしはずっと赤いチヨコボックスを持ったままだ。なんで1時間も抱えてなければなら

ないんだと思うけれど、ビジンさんがそうして包みを抱えているんだからしょうがない、お付き合いだ。あたしは耐えられず毛糸の手袋をしているけれど、ビジンさんは白い細い手にじかに包みを掴んでいる。いくら寒くたってじいつと掴んでいれば汗をかく。はた目にも黒い袋が汗で湿っているのが分かる。本人は気付いてない。一心に瞬くんを見つめ続けている。本当に瞬くんが好きなんだ。

あたしはさつきニヤニヤしたことに自己嫌悪を感じた。あたしは二人の関係を打算的に、・・・自分の都合のいいように、計算していた・・・。

言わなくちゃ、ビジンさんに、あのことを。でないと、あたしは申し訳なくて彼女と友だちでいられない！・・・

「あのね、ビジンさん。実はあたしの下駄箱に・・・」

「来た！・・・」

ビジンさんは失神しそうな声を上げた。こつちの話なんてまるつきり聞こえてない。ええゝい、ままよ！

「行くわよ！」

あたしは周りの瞬くん親衛隊の冷たい視線を振り切るように、硬直してしまったビジンさんの腕をひっ掴んで、ズカズカ、部屋から土手に上がる階段に向かって歩いた。土手に上がった瞬くんがあたしたち二人を前に困惑した表情を浮かべた。あたしはバシン！とビジンさんの背中を思い切り叩いた。「イタッ！」とビジンさんが飛び上がった。

「渡すわよ！チョコ！」

あたしは言つてチョコボックスをズイと差し出した。我に返ったビジンさんも包みを差し出した。そうだ、あたしたちは正々堂々勝負するんだ！後悔しないために、友だちで居続けるために！・・・そうだ、これではつきりする・・・

あたしはビジンさんが話すのを待った。彼女に先に話す権利がある。

「あ、あ、あ・・・あの！・・・」

ビジンさんはガチガチ体を震わせて白い息を吐きながら一生懸命言った。

「チヨコ、受け取ってください！……あ、あの、わ、わ、わ、わたし……」

菊池くんが好きです！ わ……わたしとつき合ってください！
！……」

よく言った！ あたしはビジンさんを肩でドンと押すように瞬くんの正面に立つと思い切って言った。

「あたしも瞬くんが好きです！ あたしとつき合ってください！！」

……やっぱ、真っ赤だ、あたし……。

ビジンさんがドン！とあたしの肩を押し返してくる。あたしたちは二人揃ってまっすぐ瞬くんにチヨコレートを差し出している。

瞬くんは……ひどく戸惑っている。すごく困って、そして……

「ごめん。俺、好きな子がいるんだ……」

と……言った……

グラツと、ビジンさんの体がまっすぐ後ろにひっくり返りそうになって、あたしはびっくりして支えた。あたしはビジンさんの包みをひったくと自分の箱といっしょに瞬くんに押し付けた。

「これ、食べて！ 一生懸命作ったから！ 食べてくれるよね！？」
瞬くんはあたしの剣幕に圧されて「うん……」とうなずいた。

「ほら、ビジンさん、瞬くんチヨコ食べてくれるってさ。よかったね？」

「う……」

いきなりドン！と突き飛ばされた。「うわっ」とあたしは危うく土手を転げ落ちそうになった。ビジンさんは「わああ~~~~ん」と大声で泣きながら走っていった。

「ビジンさーん！！……」

あたしも大声で呼びながら後を追って走った。親衛隊の女の子が
いい気味というように薄笑いを浮かべていた。分かるよ、その気持

ち、ルール違反のあたしたちも悪いけどさ、でも、あんた、

「さいっていだよっ！！！」

と叫んだときにはあたしはもう校舎を回っていて、彼女には聞こえなかっただろう。でも・・自分で分かっているよね？ 瞬くんを好きって気持ちは同じだもんね・・・。あたしは彼女の代わりに泣いてやった。「わあわあ」と。あんたも後で泣きな！

ビジンさんは校舎のＬ字の窪んだ角で、真っ暗な陰の中で、しゃがみ込んで泣いていた。

「ビジンさん、ねえ、ビジンさん」

あたしが泣き声で呼んで肩を揺るといきなり立ち上がってあたしをぎゅうつと強く抱擁してまた「わあああああああ」と大声で泣いた。・・耳が痛い。

あたしも思いきり抱きしめ返してやった。ビジンさんももつと強く抱きしめてきて、あたしも・・って死ぬぞ、こら！

あたしたちは女二人抱きしめ合って大声で泣いた。

泣いて、泣いて・・

すつきりしたかい？・・

ビジンさんが落ちて着いてきたのを見計らってあたしは黙っていた秘密を告白した。

「あのね、実はね、あたしの下駄箱の靴の中にメモが差し込まれていたんだ。『6時40分、C棟松の木で待つ。菊池』って・・。バカだよなあ。瞬くんからじゃないかって、舞い上がったちゃって・・。えへへー、そんなわけないのにね？ 菊池違い？ 心当たりないなあ？ どうせ誰かのイタズラだね？ 時間になって待ってたらクラスのバカ男子が『やーい、引っこかったあゝ』なーんて、にくったらしいこと言っ飛ばひ出して来るんだよね？ あははは、そんな手に引っかかるもんですかーってね」

「則子！」

「は、はいー！」

ビジンさんにピシヤリと言われてあたしは思わず気をつけの姿勢

を取った。ビジンさんは恐い目であたしを睨み付けて言った。

「まさか行かないわけじゃないでしょうね？」

「え？ イタズラに決まってるよ。あ、あたしもさ、もしかして・
なーんて希望も・・チラツと・・持つちゃったりしたけど・・、で
も・・、もう・・、はつきりしたじゃない？ あたしたち、ものの
見事に玉砕しちゃったじゃない？」

「わたしなら行く」

「え・・・・・」

「菊池君が待つてると言ってるのよ？ どうして行かないのよ？」

「でも、もう、ふられちゃったし・・」

「菊池君は自分から告白するつもりでいたから、だからわたしと二
人じゃ言えなかったのよ」

「そ、そうなのかな？・・」

「そうよ！ 信じなさい！」

ビジンさんはあたしの肩を掴んで激しく揺さぶった。目が真剣だ。
あたしも、真剣に答えなくちゃ。

「菊池君に待ちぼうけなんて喰らわせたらわたしが許さないんだか
ら！ あなたなんか、絶交よ！！ もし、本当に悪戯で誰かがあな
たをからかうようなことをしたら、わたしがぶん殴ってやるわよ！
！！」

わたしはジーン・・とした。

ビジンさんは涙にふやけた顔を笑わせると、スタジャンを脱いで、
あたしに着させた。

「ビジンさん・・、これ・・」

「わたしの菊池君への思いが詰まったジャンパーよ。お守りに着て
いきなさい」

「ビジンさん・・。あたし、ダルマ」

コートの上から無理やり着させるんだもん。ビジンさんはブルツ
と震えて「あなたのコートよこしなさいよ」と言った。あたしはス
タジャンとコートを脱ぐと、コートをビジンさんに渡して改めてス

タジャンを着た。ああ、ビジンさんのぬくもりが。・・・でかいぞ、こら。

「あのさ、これ、瞬くんにあげればいいの？」

うーん・・・とビジンさんは考えて、

「ダメ。あなたにあげる。わたしはもうあなたのお友だちモードにチェンジしたの」

「ありがとう。でもコートはあげないよ」

だって高かったんだもん。

「ケチ」

「はいはい。わたしはビジンさんみたく心が広くありません」

あたしたちは微笑み合った。

あたしはバス停までビジンさんを送って行って、時間を見て、約束の場所へ向かった。

そこに、

瞬くんがいた。

「ほんとうに瞬くんだったんだ・・・」

あたしは夢の中のようにふわふわして、全然実感が持てなかった。電灯の明かりの下、瞬くんも緊張したように青白い顔をしていた。

「ごめんな、さっき。美原さんに悪いことしちゃったな」

「うん。泣いてたよ、すつごく」

「聞こえた。あんな大声で泣くなんて、びっくりした。あの後太田が泣き出してたいへんだっただぞ」

「ああ・・・」

太田君だったつけ、C組のキャプテン君。

「あたしビジンさんとキャプテンさんが上手くいくといいなあーなんて勝手に思ってた」

「実は俺も・・・自己嫌悪だよなー」

「うん・・・」

・・・なんか、瞬くんってさ・・・

「ほれ、バレンタインデーのプレゼント」

「えっ!？」

瞬くんに3色チェックの紙袋を差し出されてあたしは驚いた。

「瞬くんって、・・・女の子だったの？」

「バーカ。バレンタインデーの本場っていえばヨーロッパだろ？」

あつちじゃ男女を問わずプレゼントし合うじゃないか？」

「そうだね・・・えへへ、嬉しいなあ。開けてみていい？」

「うん」

瞬くんの頬を染めた顔にニヤつきながらあたしは袋を開けた。中には赤い包装紙に包まれたチョココレートの箱のような立方体が入っていた。

「これも？」

「うん」

あたしが包装紙をはがすと、中身がバラバラとほぐれた。頭をちよこつと覗かせてきれいにラッピングされた・・・チョココレートバ
ー?

「食べるなよ」

「？」

よく見れば包装紙の内側に茶色く粉が散っている。これは・・・

「コンテだ!」

絵のデッサンに使う鉛筆とクレヨンの中間のような画材だ。中身は同じコンテだけど、7本、7色の紙できれいに巻かれている。本当にチョココレートみたいだ。

「これ瞬くんが巻いたの？」

「うん」

「瞬くんってけっこう乙女チックなんだね？」

「悪いかよ？」

「ううん。全然。大好き」

瞬くんは女の子のように赤くなった。あたしは王子様の瞬くんが好きだ。でも、文系のあたしの思い描く王子様は必ずしもスポーツ

が出来なくなつていい。キラキラとかつこよく、はにかんだ優しさが素敵なのだ。

「ありがとう」

あたしは嬉しくて素直にお礼を言った。

「うん」

瞬くんも嬉しそうにはにかんだ笑顔を浮かべた。

「でもさ、男の子はホワイトデーでよかったんじゃない？」

あたしが訊くと、

「だってさ、聖良さん、なんか俺にチョコくれないような気がしてさ・・・」

瞬くんは気弱そうに言った。こういう顔は、他の女子は知らないだろうな。

そう思ったからこうして自分でプレゼントを用意して、えーと・・・朝のうち？それしかないよね？あたしの下駄箱にあのメモを忍ばせたんだ。

則子でいいよ（ハート）というのはいずれ後のお楽しみに取っておいて。

「あたしだってチョコあげたかったけど・・・、ぜんぜん自信なかったから。あたしで、いいのかな？」

「聖良さんが好きなんだ」

「うん・・・」

ミノコ、ビジンさん、ゴメンっ！！！！ あたしは世界一幸せで有頂天な女の子です！

「帰ろう。送っていくよ」

「うん」

星が輝く。天の川まで見えそうだ。

「それ、美原さんが着ていたのだよね？」

「えへへー、いいでしょう？ あげないよ」

なんか本当に気に入っちゃった。土曜日のカラオケパーティーはあたしが奢らなくちゃだめかなー？・・・

瞬くんが言った。

「ホワイトデーのお返しは聖良さんの自画像でいいよ」
あたしだってチョコあげてるぞ。

「じゃああたしはねー・・・、今度の練習試合のハットトリックでいいよ」

「あ、そんな言葉知ってるんだ？」

「えへへー、付け焼き刃」

「上南は強いんだぞ？」

「愛の力を見せてください！」

「うーん・・・、頑張るか？」

「ファイト！」

あたしたちは笑った。幸せだ。

練習試合、ミノコとビジンさんといっしょに応援に行こう。二人とも、来てくれるよね、きっと。

おわり。

P K戦（後書き）

* 軽〜いお話のつもりが、かなり熱くなってしまいました。あー
あ、青春っていいですね（わたしはまるっきり無縁でしたけど）。
ありがとうございました。（2008'2'5）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814d/>

バレンタインデーラブソデー

2010年10月8日15時47分発行